

## 第四章 ジャクソン島

次の日、誰もがかわいそうなロビンソン先生について話をしていました。保安官は医者死体の近くに、マフ・ポッターのナイフを見つけました。保安官はマフを、セント・ピーターズバーグの小さな刑務所に入れました。トムとハックは心配しました。

「僕たちは、インジャン・ジョーがお医者さんを殺すのを見た」とトムは言いました。

「マフはお医者さんを殺さなかった。かわいそうなマフ！」

「分かっている」とハックは言いました。

「俺だって、マフ・ポッターをとてつゝ気の毒に思ふよ。だつて俺たちは何も言つちやいけないんだ。思い出せ、インジャン・ジョーは危険なんだ——つゝごく危険なんだよ」

「僕たちはこれを秘密にしなくちや」とトムは悲しつゝに言いました。

夜、トムはロビンソン先生とインジャン・ジョー、マフ・ポッターについての悪夢を見ました。

トムはその恐ろしい秘密を守りましたが、自分の見たことが忘れられませんでした。ポリーおばさんは、トムのことを心配しました。

ポリーおばさんはトムにいろいろな薬をたくさん与えましたが、トムは良くなりませんでした。

トムは学校でも落ち込んでおり、ベッキー・サッチャーはもうトムと話をしませんでした。

「何てひどい人生だらう！」とトムは考えました。

「誰も僕のことを愛していないし、僕はつゝつゝ不幸だ」

そして夏、学校が終わりました。

トムと友達のジョー・ハーパーは、ミシシッピ川沿いに釣りに行きました。

彼らはおしゃべりをし、大きな蒸気船が川を行つたり来たりするのを眺めました。

ある日、トムが「何か別の、わくわくするつゝなことをしようよ！」と言いました。

「それは素晴らしい考えだね」と、いつでも何か楽しいことをする準備ができているジョーは言いました。

「でも、僕たちは何をしよう？」

「出かけて、ジャクソン島で暮らすのさ」とトムは興奮して言いました。

「僕たちは海賊になれる。海賊の生活はわくわくするよ」

ジャクソン島は、セント・ピーターズバーグの近くにある小さな島でした。

ジャクソン島はミシシッピ川沿いにありましたが、誰もそこには住んでいませんでした。

「ハック・フィンが僕たちと一緒に来られるよ」とトムは言いました。

「いいかい、ジョー、君のお母さんにもお父さんにも、誰にでも僕たちの冒険について言つちやいけないからね。家に帰つて、何か食べ物を持って来るんだ。深夜にここで落ち合おう」

トムとジョーはわくわくしてつゝいました。

深夜、三人の少年は川沿いで落ち合いました。

トムはいくらかの肉を持ってきて、ジョーはいくらかのパンを持ってきて、ハックはフライパンを持ってきました。

三人には、自分たちのわくわくするような冒険を始める準備ができていました。彼らは古いかだを見つけると、川を下ってジャクソン島へと向かいました。ジャクソン島に着くと、彼らは大きな木の下で火を起こして、いくらかの肉を調理しました。

「こいつはすごく楽しいね！」とジョーは言いました。

「僕たちは自由で、僕たちが望むことは何でもできる！」とトムは言いました。

「海賊は何をするんだろう？」とハックが尋ねました。

「彼らは船に乗って、宝物を盗むのさ」とトムは言いました。

「それから彼らは島に行って、宝物を秘密の場所に隠すんだよ」

三人の少年は偉大な冒険について語り、それから暖かい夏の夜の間に、星の下で眠りました。

彼らはとても幸せでした。

翌朝は晴れて暑く、少年たちは川へ泳ぎに行きました。

それから、彼らは釣りに出かけ、朝食のために魚を調理しました。

朝食後、彼らは島を探検して、もう一度泳ぎに行きました。

午後には、彼らは火の周りに座って、いくらかの肉とパンを食べました。

不意にトムが、「君たちには奇妙な音が聞こえるかい？ ほら」と言いました。

「僕にはそれが聞こえるよ」とジョーが言いました。

「何だろう？」

「見に行こうよ」とハックが言いました。

彼らが川へ走って行くと、二隻の大きな蒸気船と、それらの近くにたくさんの小さなボートが見えました。

「何が起こっているんだ？」とジョーは言いました。

「セント・ピーターズバーグからのボートが全部川沿いに出ているし、二隻の大きな蒸気船もある」

「彼らは死体を探しているんだよ」とハックは言いました。

「同じことが去年の夏に起こったよ、小さなビル・ターナーが川に落ちて溺れたときね」

「彼らは今回は、誰を探しているんだろう？」と、心配になったジョーは尋ねました。

トムは少しの間考えて、「分かった！ 彼らは僕たちを探しているんだ！ 彼らは僕たちが溺れたと思っているんだよ」と言いました。

三人の少年は笑って、とても偉くなった気分になりました。

「セント・ピーターズバーグの誰もが僕たちを探しているし、僕たちについて話しているのさ」とトムは楽しそうに言いました。

「僕たちはすごく有名なんだ！」

トムとハック、そしてジョーは素晴らしいひとときを過ごしていました。

彼らは、ジャクソン島の本物の海賊のような気持ちでした。

その晩に、ボートと蒸気船は立ち去りました。

少年たちはまた魚釣りに出かけて、夕食のためにいくらかの魚を調理しました。

ハックとジョーは星の下で眠りましたが、トムは心配でした。

翌朝、ハックとジョーが起きたとき、トムはそこにいませんでした。

「トムがここにいないぞ」とジョーが言いました。

「トムはどこ？」

「分からないな」とハックは、辺りを見回しながら言いました。  
数分後、ハックは「見ろよ、ジョー！ トムのやつ、川で泳いでいる！ トムは島に戻ってくるよ！」と言いました。  
トムは水から出て、二人に自分の話をしました。  
「僕は昨夜、眠れなかったんだ」とトムは言いました。  
「僕はポリーおばさんについて考えていた。だから僕は家に帰ったんだけど、誰も僕のことを目に入らなかった。僕はポリーおばさんとジョーのお母さんを見たよ。彼らは二人とも泣いていて、とても悲しそうだった。みんな、僕らが死んだと思っているんだよ。他にも面白いことをいくつか聞いたよ」  
「何を聞いたんだい？」とハックが尋ねました。  
「俺たちに教えてくれよ」  
「ええとね、日曜日に教会で、僕たちのお葬式があるんだ」とトムは言いました。  
ハックとジョーは、大きな目で彼を見ました。  
「それで今、僕にすごくいい考えがある。聞いてくれ…」  
トムは友達に、素晴らしい考えについて話をしました。  
彼らはそれが気に入って、笑いました。  
日曜日はお葬式の日でした。  
セント・ピーターズバーグには、幸せな顔は一つもありませんでした。  
村の誰もが小さな教会にいました。  
ポリーおばさんとシッド、ジョー・ハーパーの家族はみんな黒い服を着ていました。  
牧師は三人の少年たちについて、たくさんの優しい言葉を述べました。  
少年たちの家族はたくさん泣きました。  
ベッキー・サッチャーも泣きました。  
誰もが悲しんでいました。  
すると突然、教会のドアのところで物音がしました。  
牧師は顔を上げて、話すのを止めました。  
誰もが振り返り、口を開いて見つめました。  
三人の少年は、教会にゆっくりと歩いて入って行きました。  
トムが最初で、それからジョー、続いてハックでした。  
少しの間、みんな黙っていました。  
彼らは、自分たちの目を信じるができなかったのです。  
どうしてこんなことがあり得るんだろう？  
彼らは少年たちのお葬式のために教会にいましたが、その代わりに…。  
突然、ポリーおばさんとシッド、そしてジョーのお母さんが立ち上がって、少年たちに向け寄りました。  
彼らはトムとジョーにキスをしました。  
ポリーおばさんは泣いて、それから笑いました。  
かわいそうなハックは、どうしたらいいか分かりませんでした。  
誰も彼を見ませんでしたし、誰も彼にキスをしませんでした。  
ハックは悲しくて立ち去りかけましたが、トムがハックを止めました。  
「ポリーおばさん、それは正しくないよ」とトムは言いました。  
「ハックは僕の親友なんだ。誰もハックに会ってうれしくないの？」  
「ああ、トム、お前が正しいよ」とポリーおばさんは、ハックを見ながら言いました。

「私たちはみんな、ハックに会えてうれしい」  
ポリーおばさんはハックにほほ笑んで、彼にキスをしました。  
ハックは幸せでした。  
トムは自分の素晴らしい考えを、とても誇らしく思いました。  
それから、牧師が三人の少年に目を向けて、「これは素晴らしいサプライズだ。トム、ハック、そしてジョーが私たちと一緒にここにいて、彼らは元気だ」と言いました。  
その小さな教会にいた誰もが笑いました。  
「幸せになって、歌おう！」と牧師は喜んで言いました。